

2020年4月10日

## 復活の希望

立川教会の皆さま、主のご復活のお喜びを申し上げます。

政府の緊急事態宣言が発出され、さらなる自粛の要請が続いていますが、一人ひとりの生活の中に、主の復活の喜びが行き渡りますように祈っています。

今日の第2朗読、コリントの教会への手紙（1コリ5・6b-8）で、聖パウロは教会共同体が「いつも新しい練り粉のままでいられるように」と力強い励ましのメッセージを告げています。パン種は、ここでは悪いものとして捉えられており、〈古いパン種〉あるいは〈悪意や邪悪のパン種〉をきれいに取り除くようにと勧められています。わずかなパン種、言い換えれば悪意やモラルの低下がわたしたちの家庭や社会生活にもたらす影響は小さいものではないと鋭く指摘しているのでしょうか。今、新型コロナウイルス感染拡大が続く中、誰もが不安やフラストレーションを抱えて生活しています。だからこそキリスト者は「悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけ」たいと思います。そして「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らさなさい」（ロマ12・17-18）という聖パウロの呼びかけに心を開き、助け合いの心と善意をみたいと願わずにはられません。

「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに、マグダラのマリアは墓に行った。  
そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。」（ヨハネ20・1）

イエスさまが十字架上で死んで葬られた時、弟子たちとマグダラのマリアの心の中に生じていたのは、絶望と大きな不安と恐れ、そして悲しみであったことでしょう。その心情は「主が墓から取り去られました。どこに置かれているのか、わたしたちには分かりません」（ヨハネ20・2）という言葉によく表れています。シモン・ペトロとイエスの愛弟子は、走っての墓を確かめに行きますが「見て、信じた」（ヨハネ20・8）とあります。不思議な転換点です。

一体、何を「見て、信じた」のでしょうか？

決してイエスさまを直接、目にした訳ではありません。弟子たちは空の墓をとおして、自分たちの心の中に今までに体験したことのない深い喜びが沸き起こり、復活の希望が芽生えていることに気付いた、と言ってもよいでしょう。すべて

が終わった訳ではない。希望が死んでしまった訳でもない。キリストは生きて、わたしたちと共におられる。このことに気づき、復活の喜びを多くの人々に伝える証人となっていきました。わたしたちも改めてこの復活節に、初代教会の人々の歩みを思い起こし、真実のパン（生ける神の言葉）を味わい、その喜びに生きるよう招かれています。菊地大司教さまは新たな書簡「日本政府による緊急事態宣言を受けて」を公開され、その中で政府の緊急事態宣言が解除される5月9日頃までは、公開ミサの中止を継続する方針を

(<https://tokyo.catholic.jp/archbishop/message/38161/>) 示されています。

「どうか、平和の主御自身が、いついかなる場合にも、あなたがたに平和をお与えくださるように。主があなたがた一同と共におられるように」（2テサロニケ3・16）。

復活のキリストがわたしたちの歩みを守り導いてくださいますように、希望のしるしである聖母マリア、諸聖人の執り成しによって祈りましょう。

カトリック立川教会 主任司祭  
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝